

(一) ロシアへ

二〇〇五年三月、文学部から移った先の先端科学研究所で定年退官のときを迎える。そこまで人生でやろうとしていたことはすべてやり尽した。思い残すことはなにもなかった。一刻呆然としたが、過去の自分に思い残すこともなかった。

その六月、私は再婚した妻と五歳の娘を伴って、極東ロシアの先にあるカムチャツカ半島に出掛けた。そこには心にしみるような友情を抱える、幾多の顔が待っている筈だった。

この本の第二部で一九九四年と五年にカムチャツカへ出掛けたことはすでに書いている。ただ、それから十年後のロシア人とロシア社会の劇的な変化を書く仕事はまだ残っていると思う。

九四年、最初にロシアに出掛けた時、ロシアの社会状況も最悪だったが、私の身边もそれと同じくらい最悪だった。二月に私の心臓病に診断が付き、特效薬も手元に届いた。しかし、その後我が身に起こった事態の成り行きを考えると、それ以上の最悪はない、とその当時から思っていた。

ただ、それから十年後、ペレストロイカに翻弄されていた九十年代半ばのロシア社会について、あるいは国家による完全管理社会の崩壊した世界とはなんだったのか。そこでロシア人は何に苦しみ、何を決意、決断したのか。それを改めて確かめたい、というのが今度のロシア行の狙いだった。

二〇〇五年、札幌からカムチャツカへの飛行ルートは変わっていた。札幌―新潟―ハバロフスク―カムチャツカPK、というのがハバロフスクからウラジオストクトクトクになり、飛行機が最新型へと変わり、国際空港のインフラも大いに変わっていた。それは私自身の中にかけて隠れていたロシアに対する怯えが今回、完全に消えてしまっているのと無縁ではないかもしれない。

九四年の日本出発の時、私は大きな決断に迫られていた。人には余り言わなかったが、カムチャツカ行にはトドの研究以外に、日本人として決して無視出来ないアツツ玉砕という太平洋戦争時の問題を自分の肌で感じ、現地に寄り添う場所で考えてみたい、という強い願望があった。

しかしその反面、自分の身体の状態を考えると、現実的にみて、それは無謀に近い話でもあった。その狭間で、私の心は確かに揺れた。妻が泣きながら止めてどい、親しい友人の多くも、それだけは止める、と口を酸っぱくして腕まで掴んだ。でもやはり、私は決断した。身の回りの大事な絆を振り

切り、遙か彼方のカムチャッカに向かったのだ。

でも二〇〇五年のこの年、カムチャッカ行にまた別の目的が生まれていた。それはカムチャッカでかつて出会っていたロシア人の研究者とその家族。素朴、愛嬌、心の優しさ、自然相手の研究に対する底抜けの情熱。どれもこれも、今や日本国内では決して出会うことのない、素晴らしく魅力的な人々だった。それを改めて確認する旅、それも今回の目的の一つだった。

二〇〇五年、途中に乗った飛行機ばかりでなく、ロシア国内では空港も、街を走る自動車やバスも、すっかり様相を変えていた。日本製のポンコツ車が程度のいい中古車にかわり、すべての学校や市役所といった公共機関が順調に機能を果たしている。バザールに並ぶ食糧の質と量、女性や男性の服装と足元、そして明るくなった顔、顔、顔。そこには戦後二十年代の日本に替わって、昭和四十年前後の日本の姿があった。

そうした中で、私は今回、親しかつたロシア人とロシアのすべてについて英語（！）で話し合った。相手はブルカノフ夫妻、ワロージヤの夫婦、それにセルゲイやサーシャやユーラの夫婦とも夜遅くまで語り合った。そして彼等の本音を知らされた。

旧ソ連時代、彼等みんな、国立大学出のエリートで人生をスタートしていたが、旧ソ連時代の個人的評価について、各々別の考えを持っていた。

私が最も信頼し、新ロシアの将来を担うだろうと思っていたブルカノフは旧ソ連時代を無造作に否定し、嫌つてもいた。理由は二つあった。一つは彼が幼かった時に暮らしていた片田舎の村で、ごく普通の話をしていて優しいお祖父さんがある日逮捕され、秘密警察（KGB）に連れ去られていったこと。そして彼の生きている間、二度と姿を見せることがなかった、という自己体験に基づいていた。

ブルカノフの挙げた二つ目の理由は、旧ソ連時代に国民の義務として徴兵された一年半の体験であった。彼はそこで優秀な男として注目され上に、徴兵期間の終了直前には隊長に呼び出され、

「お前、軍隊に残る気はないか。もし残るなら左官（少佐）大佐）級の待遇を保証するぞ。」

と言われた。しかし彼は、卒なく断って軍隊を離れた経験があった。

「あのね、鈴木さん。旧ソ連の将校はひどいものだったよ。なんでもかんでも自分本位で、公私の別がまったくない。軍隊の権限も物資や武器も、全部勝手に処理するのが当たり前だと思っっている。それが僕には耐え難かった。」彼はそう言いながら、顔を歪めていた。

次はユーラ。旧ソ連時代に彼の父親はモスコウ大学教授で、彼自身もモスコウ大学出の超エリートとしての道を歩んでいた。そんなユーラはこう言った。

「あの時代、芸術家や研究者は優遇されていた。だから、毎月の給料こそ少なかったが、研究費は豊かだった。それに人々の住む家も多様で、僕の育った家には大きな部屋が六つもあつたんだよ。でも今の僕達はみんな一律にこんなアパート暮らし。研究費も少なければ、幾ら努力していても学者・研究者としての特典などにもないよ、これこの通り。」

それからサーシャの場合はこう言った。

「僕はね、典型的なロシア人の祖父母も両親も兄弟も好きだった。でもペレストロイカの嵐が始まる直前、僕はこの国に未来はないと思つていた。だから、この国を飛び出し、アメリカで生物学の学位を取つた。そして今のロシア時代を迎えたこの国に再び戻り、旧ソ連とはまったく違う新しい時代の到来を期待したのさ。でも駄目だ、この国は。ロシアのアカデミーは僕がアメリカで取つた学位をまったく認めようとしなからね。」

彼等はこうして三人三様の考え方をしていた。しかし、同じ研究者仲間の中で一回り年齢が上のワロージャの考え方はまた違つていた。

「鈴木さん、私は貴方と多分、年齢が近い筈だ。だから、他の連中と旧ソ連について違う印象を持つているかもしれない。私の父は地方の労働者組織に属し、中流階級の生活を送つていた。だから、共産党独裁の旧ソ連を悪いとも良いとも思つていない。ただ、それが国家というものであり、我々国民は素直に生きるだけだ、と思つていた。非難したり、反対する理由などにもなかつた。そして、時代がこうした新ロシアになつても、私の生き方は変わらない。幾ら貧しくても、ただロシアの海に囲まれながら、好きな海洋哺乳動物を研究したい。それがすべて。ロシア聖教が心の底にあるような気がするよ。」

そのワロージャに、私はもう一つ聞きたいことがあつた。

「ワロージャ、君は我々のフィールドだつたメドニー島の旧住民、アリユート人の歴史について聞いているかい？」

すると徐に、彼は落ち着いてこう答えた。

「一九四二年に彼等は全部、日本に一旦連れ去られたようだね。確か、小樽だつたかな。でも戦後間もなく戻されて、あの島で生活を再開した、と聞いている。ただね、終戦直後の彼等はアメリカ人のブローカーに雇われ、北極ギツネの捕獲事業を専門にやらされていたという話だよ。彼等は愚かで、本当に貧しい。ただね、僕自身は何故か彼等に親しみを感じて、今も付き合つている。それは僕とメドニーと一緒に暮らしたことのある貴方にも当然、気付かれていると思うけど、違うだろうか？」

勿論、夏でも暴風雨のつづくあのメドニー島での日々は忘れられない。今や無人島になつているあの島で、弱り切つた心臓を抱えたまま、私は朝に夕に、南東の海の彼方にある筈のアツツと、その島で起こつた戦時中の玉砕と

いう歴史的事実について考えつづけていたのだから。

二〇〇五年、そんなカムチャッカを去る時、ある集まりで高校を卒業後に私達研究者のアシスタントをしていた若い男が、思わぬような話をしてくれた。

「鈴木さん、共産党員の僕にとってスターリンこそ英雄だし、ゴルバチョフよりエリツインの方が信頼出来る。ゴルバチョフは僕らにとって売国奴だよ。まったくアイツはなにを考えていたのか、……?」

そう言いながら彼は窓の外を眺め、寂しそうに笑っていたのが印象に残る。その年。カムチャッカの首都PKに、外国資本の大型スーパーが街中を占拠し、我が物顔で建っていたのが忘れられない。

(二) インドへ

今から二十数年前、北海道でも原発の稼働開始時期を迎えていた。いわゆる原発の話である。

その時、アラスカオオカミの研究終了直後から診断不明の心臓病で倒れていた私の手元に、ある誘いが掛かってきた。相手は素性不明の北海道教師と宗教者の会。一向に親しみのない相手だったが、原発の稼働開始に反対しようという趣旨に賛同し、二泊三日の現地座り込み運動に私も参加してみた。最初の日は一日中、降りつづく雨に祟られた。参加者も当然少なく、三十人ほどの数しか現地に集まらなかった。しかもその夜、岩浜のテントで寝る段になる頃、辺りから次々と人影が消えていく。そして夜の八時を過ぎる頃になると、私の他には白い肌着に黄色い袈裟を掛けた人物が残るだけになってしまった。

「どうしたんでしょうね?」

「さあ、どうしてでしょうか、……?」

「ここの原発稼働開始時期は目の前ですよ。だとしたら、今この時期に反対の声を挙げるのが当然でしょう。なのに主催者まで何処かに消えてしまうとは何事でしょうか。」

「ところで遅くなりましたが、私は石谷という名前の坊主です、見ての通り、日本山妙法寺に所属しています。」

「私の方は北大に在職しながら、アラスカのオオカミを研究している学者の端くれです。ただ今は、心臓病にやられていまして、満足に身体も頭も動きません。」

「やあ、そんな身体で、……!」

テントこそ張ってあるとはいえ、その夜、累々と並ぶ岩や石の上に寝るのは辛かった。だからと言うべきか、そこでと言うべきか。私達二人はそれか

ら随分話つづけた。しばらくして、話相手になった石谷上人が訥々と自分の過去と現在について次のように話し始めた。

私は昭和十六年の生まれ。場所は旭川の山奥にあつた開拓部落。そこで旭川の高校を出た時、彫刻家になりたくて上京した。しかし東京には身寄りもなく、芸大に合格した訳でもなかったから、彫刻の勉強も出来なかった。しかもその当時、東京が六十年安保の反対運動や全学連を中心とした学生運動が盛んだったから、私もすぐ、その世界に飛び込んだ。ところが周りを見ながらふと考えた時、自分の居場所がどこにもないことを思い知らされた。

その直後から、私の生活は乱れ始めた。乱れて荒れて、最後は暴力団の手先になって働き、暴れつづけた。でもやはり、薬に溺れるような日々の生活にも居場所がなく、改めて暴力団から逃げ出す道を探す日々を迎えた。

そんな折りも折り、私は偶然、藤井日達上人（日本山妙法寺開祖）と出会い、一生進むべき道を受けられた。

どうでしょうか。私は今でこそインドやスリランカでの布教活動に専念していますが、やがて近い将来にはインドに自分の寺を建てる計画がありますので、私は貴方をそこにお迎えしたいのですが、如何でしょうか。

私も彼と同じ昭和十六年の生まれ。ある時期、彼と同様に学生運動へ参加した経験もある。だからその晩すぐ、私達二人は特別な親近感を分かち合う仲間になっていた。

「じゃ、ここで約束しましょう。私が定年の退官時期を迎えたら、まず先に貴方のいるインドへ出掛けましょう。」

幾らそれが偶然に偶然の重なる話とはいえ、男同士の約束は約束だった。そこで定年退官のその年（二〇〇五年）の秋、私は彼との約束を果たすべく、人生で最初にして最後だと思いつながら、インドへ向かった。

そうしたインドへの旅に関連して、私は個人的に三つの期待があつた。その一つは当然ながら、石谷上人のインドにおける布教活動の実態を探ること。二つ目は、お釈迦様に関わる聖なる地すべてを回り切ること。そして最後の三つめはインドの近代化に貢献したガンジーの史跡を辿り、後日有名になつた塩の行進に自分自身が参加することだった。

しかし、その塩の行進に参加する直前、南インドの末端にある石谷上人の寺で、インド特有の激しい下痢に見舞われ、苦しみ、倒れた。

そこで考えを改め、私はまず南インドから北インドへ旅立ち、さらにお釈迦様誕生の地ルンビニにも寝泊まりしながら、インドからネパール経由で日本に戻った。

それは当初計画に反して、結局一カ月半の旅に終わった。しかし、その短

い期間ですら、私にはインド人の貧しさを無視するような生き方や、その社会制度の在り方や宗教を敬虔に敬う日々の姿勢に、計り知れない脅威を覚えさせられた。

日中、どこにでも見掛ける瞑想者の世界、社会制度の内側から追い出されたアウトカーストの人々。見るもの聞くものすべてが強い影を私に投掛けているように思えた。

インド国内には国家の人口調査に含まれないジプシーもいる。狭い国道をゆつたりと占拠する牛車。小型のバイクに三輪車を取り付けた特殊ハイヤー。鳴り止まぬ警笛の嵐。片田舎で夕方から姿を現すクジャクにインドジャッカル。紙もトイレもゴミ箱もないヒンズー教の世界。そのヒンズー教寺院の聳え立つ塔に刻まれた数々の神々。そしてその神々の中に小さな居場所を与えられたお釈迦様。

あれから十年近く経った今、そのどれもが未消化のまま、私の腹の中に居座っている。

インド、それは魔の世界。ユダヤ教や今のイスラム教と並んで、とても理解出来ない謎の世界。その中にあの石谷上人がいて、日本山妙法寺の布教活動をつづけている。これもまた、私には理解し難い姿の一つ。

インダス川に流されたあの老人の遺体は今どの辺を漂っているのか。ふとそんなことを考えてみる。

(三) 信州の山里(高遠)

インドから戻ったのが十一月後半。札幌はすでに冬の季節を迎えている。雪は少ない代わりに、足元を吹き抜ける風がとても冷たい。

インドを去る際、お釈迦様が最初に説教を始めたという菩提樹の木の下から、壺に入れて浄土を日本に持ち帰っていた。それは偶然、東京からインドへ立つ寸前に、ある信州人から頼まれていたもの。相手の名前は野溝さん。信州の伊那谷にあるお寺の総代を務めるお爺さんだった。

浄土を片手に、そこへ電話を掛ける。

「どうしますか、この浄土？」

「やあ、先生。本当に持ち帰ってくれたのですか。有難い、有難い。」

「そちらになんとか郵送しますか？」

「いや、そんなことはできません。大事なお釈迦様の浄土なんですから。しかし弱ったな、どうしたらいいか、……………」

残念ながら、私はお釈迦様の浄土というものに興味もない。しかし、これだって土に違いないのだから、それほど輸送に気を配る必要もなさそうに思える。しかしどうやら、相手の方はそれで済まない。

電話の話が決まらない。自分もその時六十年代、ただし電話の相手は信州伊那谷の奥に住む八十代のお爺さん。どうもテンポが合わない。仕方なく、こちらから打開案を提示してしまう。

「それじゃ、私がそちらまでお持ちしましょう。」

これでその時点での話し合いは終わった。が、それを切掛けにして急遽、私達家族三人の移住先まで決まってしまった。住所は長野県伊那市高遠町、そこは戦国時代末期に、武田軍が信長の軍門に碎け散った城跡のある町。時代小説を愛読する習慣のあった私が特に注目していた場所でもあった。

翌年四月、娘は待望の小学一年生。現地で借りた家から学校までは二キロ、子供の足なら三十分の距離にある。

昭和の五十年代まで、その学校には毎年百人を超す新入生がいたというのが、娘の入学時の仲間はわずか十名。全校生徒の数も六十名だという。

その小規模校で娘はとても楽しい日々を送っているようだった。その後間もなくの六月、野溝爺さんに伴われて伊那市長がやってきた。目的は私にアイヌ犬十頭を早急に訓練して、地元一帯の野生動物対策、つまりイノシシや鹿やサルの群から地元の農家を守って欲しいという訳だ。これには事前の話し合いもあったから、私も素直にYESと答えた。そしてすぐ、仕事に掛かった。

その訓練は順調に進んだ。そうなるとTVや新聞文の取材班も次々に現れ、長野県一帯でも、大変注目される事業になった。しかし、その一年後、状況が突如変わった。

ある日、三期目を迎えるという市長が訪れ、

「私のところで飼っているアイヌ犬を貴方の手で特別な訓練をしてくれないか、.....。」

と言うのだ。しかしその頃、最初に依頼されたアイヌ犬の訓練こそ順調に進んでいたが、そのために時間の余裕も無くなっていた。だから即座に、私は状況を説明して、市長の依頼を断った。それは多分、五月の話。

そして七月、今度は副市長が姿を見せ、

「新しくここで産まれたという白い仔犬を内緒で譲って欲しい。」

と言うのだ。先に市長の個人的な頼みを断った以上、副市長のこうした依頼も私は即座に断った。だがその二カ月後、同じ副市長が来て、

「当初、三年計画だったこの事業に、最早注ぎ込む予算がなくなったので、即刻中止する。」

と一方的に言ってきた。

その言葉を聞きながら、私の腸は煮えくり返った。しかし元々、私は単なる余所者で、相手は現役の副市長。市と私の間で、最早話し合いの余地などある筈もない。

私にとって、高遠を去るのに、些かも躊躇する理由はなかった。しかし折角、地元の小規模校で楽しく二年生をやっていた娘の方が問題になった。だが一旦、こんな山奥の街で有名になってしまうと、私達家族に選択の余地は残っていない。

説得は難しい。大人には使える言葉も、子供の場合は使えない。説得、中断。そしてまた説得。最後の妥協案は翌年の春を待つて妻の実家に取り敢えず戻る事。でもその妥協案に頷く娘の顔に二筋の涙が流れている。

心の中で、私は娘に謝った。こんな辛い決断の場に追い込んでしまったことを。また、せつかく兄弟姉妹以上に仲良くなった学校友達と、再び会える機会を奪ってしまうことを。

幼い子供にも、大人に近い決断の時が来る。それは大抵、親や大人社会の勝手気儘な理由から起こり、多分、一生消えない悲しい記憶として残るだろう。

信長の息子信忠もかつて見た筈の小彼岸桜。その桜が一杯に広がる四月の高遠城址。私もまた、その時の娘の顔に浮かんだ涙の跡を一生、忘れないと心に誓っている。

高遠の桜の陰に佇めば、戦国の世の雄叫び聴こゆ

(四) 北海道の景勝地 (美瑛町)

娘と約束したように、翌年の春、娘と妻を新潟の妙高にある妻の実家に連れ戻した。しかしそこは、北海道生まれの私にとって、如何ともし難い世界に過ぎない。

冬になれば新潟でも大雪が降る。その冬景色は私の故郷ニセコを思い出させる。ただし、新潟の雪を手を取った時、雪質の違いが露骨に現われる。それに北海道にはない梅雨の季節、あの降りつづく日々も耐え難い。新潟は歴史の古いところだから、余所者をどこか信用してくれない様子も窺える。

多分、そこには他の理由も重なっていた筈だったが、ともかく、妻の両親や親族との付き合いには疲れるものがあった。そしてまた決断した。

―ここを自分一人だけで当分離れよう。娘にはしばらくの間とあって、どうか納得してもらおう。そうだ、爺ちゃんも婆ちゃんも孫がいなかったから、お前と暮らしたい、と思っている。だからしばらく、お前は爺ちゃんと婆ちゃんに楽しい時間をここで上げなさい。いいね、分かったね。―

それは当然、父親が北海道に戻る口実、娘にはどこか信じかねるといった様子も見えるが、これはこれで仕方ない。腹の中ではまた勝手な父親で御免ね、と言いながら話を決める。

行き先は勿論、北海道。ただし、十年ほど前に立ち去った札幌にも、自宅にも戻れない。そこでふと頭に浮かんだのが北海道観光の名所の一つと言われる美瑛町。

その美瑛町の片隅、十勝岳や美瑛岳に近いところに置杵牛という集落がある。それも昭和三十年代の最盛期から住民の数が十分の一に減った典型的過疎地の一つだが、縁があつて、私にはそこに多くの好意的な知人がいた。

話は二十年近く前、アラスカの小学校の校長ジョンストンからきた一本の電話から始まる。その電話で彼は言った。

―鈴木さん、僕の管理するインディアンの小中学校の子供達をこのまま放っておくとみんな両親に倣つて愚かなアル中患者で終つてしまう。それを少しでも避けるために、僕は彼等を貴方の知る日本のどこかの小学校と国際交流の機会を作りたい。どうだろうか、この子供達約二十人を二週間受け入れる僻地の学校を探してくれないだろうか。―

彼の話には理解も同意も出来る内容が含まれていた。そして偶然と偶然が重なり、わたしにも未知の世界だった美瑛町の置杵牛小学校がその相手の受け皿になったのであつた。

多分、それは一九九一年のこと。季節は厳冬期の二月。自分の育つたアサバスカンインディアンの生活しか知らない子供達がジョンストンと共にやってきた。それが置杵牛という僻地に住む人々と私という人間の深く熱い付き合いの始まりだった。

ともかく、その年の六月から私は置杵牛に単身で移り、初めて独居老人の生活を始めた。近くに大雪山系の山々が見えるとはいへ、借家は崩壊寸前、その先は冬期間の通行止めといった極端な場所柄。それでも五百メートルか一キロ先にはよく知った相手がいいて、孤独をきわめるような日々にはならなかった。

昼間は荒れ果てた周囲の草刈りと環境整備。そして夜になると、故郷ニセコに敢えて帰るべきかどうか、一人ポツネンと考えつづけた。

考えるべきことは幾つもあった。この歳で帰つたら、故郷でなにをすべきか。なにが出来るか、……………。

思い途中でニセコを離れた亡父は一体、あの当時なにを考え、どんなことに理想や目標を置いていたのか。一体、息子はどうしたらあの懐かしい父親に報えるのか、……………。

考え、悩み、時に溜息をつく。あと何年、自分はそれなりに動けるのか。まったく違った人生を歩いてきた筈の幼友達と、どんな付き合いが待っているのか。あるいは現在の町長や地元の怪しげな実力者達と、大学ばかりで生きた私に巧い付き合いがあるのだろうか。

美瑛と同じように、ニセコは今、国際的な観光地で名を売っているようだ。

しかしどう考えても、ニセコの街に外国人を受け入れる余裕も余地もなさそうだ。初めはいい。しかしその内ポロが出る。私の幼友達とその家族が、外人達を笑顔で迎える姿は想像だに出来ない。すぐメッキは剥げるだろう。剥げたら中からながでてくる。

そこまで考え、頭が止まる。窓から無人の暗闇に目を向ける。室内の光りに、横殴りの雪が反射する。音がない。地吹雪で道路が消える。でも私はここにいる。

ふとニセコを想い、小説を書き始める。それは単に、自分の思考を休めるため。出版にまで持ち込むつもりはない。

伸ばせば手の届く居間の天井。古い蛍光灯から漏れる陰気な光。それでも意味のない小説を書き、気持ちに穏やかになると故郷への道程を考える。

二〇一〇年三月、伝手を頼ってニセコに借家を見付ける。それでもまだ、故郷に戻るべきかどうか、心が決まらない。帰郷、それは私にとって、とても決断の難しいこと。移り住んで五年になる今でも、故郷をどう受け入れればいいのか、やはり答えがないようだ。

故郷は遠きにおいて思うもの、と歌った石川啄木に、深く物悲しいような親近感を覚える。

(五) ようやく辿り着いた故郷

千歳空港から西に百二十キロ、札幌からなら南西に向かってほぼ同じ距離。路線バス使うと共に二時間半、そこにニセコという町がある。

ここ四半世紀、この町は主にオーストラリアからの観光客で賑わってきた。少なくとも、新聞やテレビは、そう伝えている。しかし、近寄って詳細に調べると、現実はまだ一寸違っている。

この地域のシンボル、蝦夷富士とも呼ばれる羊蹄山を巡って、この地域一帯を行政が羊蹄山麓五カ町村と一括して呼ぶように、地形的にも、また歴史的にも、ここには独立した町村が見られない。その点はニセコの町も例外ではない。

マスコミが騒ぎ、実際に外人観光客で賑わう場所は倶知安町の一部、周知された名前ならヒラフ（比羅夫）地域。その西の外れにあるのがニセコ町になる。しかし幸か不幸か、町村の名称として倶知安は言葉にせずらく、意味も不明だ。

ヒラフという古くからの名前にちなんで、有名なスキー場があり、そこを中心して観光客は集まる。近くに温泉もあり、雪質が抜群にいいと彼等は今でも絶賛する。

多分、大正時代からニセコは有名なスキー場として知られてきた。私の知

る限り、終戦直後の時代、高松宮や三笠宮様も、遙々東京から汽車と連絡船を乗り継ぎ、スキーのためにこの地を訪れている。

雪質の点は簡単に説明出来ない。しかし、ヒラフがスキー場として有名になる理由は他にある。その一つがスキー場の前面に聳える蝦夷富士。つまり、一八九四メートルの高さを誇り、見事な円錐形の山がスキーヤーの手の届きそうな場所に聳えているからだ。

ヒラフのスキー場は、ニセコアンヌプリの南東斜面に広がる。アンヌプリの最上部にあるスタート地点に立てば、正面に蝦夷富士の雄姿が見える。それはまさに、絶景という以外、表現する言葉もない。見事でもあり、美しくもある。

富士山を彷彿させる羊蹄山が典型的な独立峰である一方、ヒラフなどのゲレンデがあるニセコアンヌプリは、その背後に千メートル級の山々が連なる連峰。しかし実際、ニセコアンヌプリの山麓にスキー場の大半が集まり、背後の山々の日本海側は森閑としたまま、人もスキー場も存在しない。

そのニセコアンヌプリのヒラフスキー場の西側に隣接して、東山・アンヌプリ・藻岩といった三つのスキー場がある。そのすべてがニセコ町に所在し、それ故に、ヒラフを含むここ一帯がニセコと呼ばれ、ニセコ町が名前の関係からこの地域の中心地とされてきた。

そのニセコ町に私は故郷として戻った。JRの駅と町役場の周辺には昔の雰囲気が残る。建物の一部は古く、改築された民家に懐かしい表札も見える。

当然、町を適度な距離で包みこむ遠景の山々は変わらない。蝦夷富士、ニセコアンヌプリ、それから町の南側に広がる昆布岳。どれもこれも、私の故郷に相応しい。その反面、この町の中心街が極端に変わっている。

国家の積極的意向がこんな僻地にも及んでいる。北海道を国際的な観光地にしようという意図が、先の美瑛町と同じ方向に変えてしまったようだ。

中心街は綺羅街道と呼ばれ、整備された車道も歩道も、驚くほど広い。そのすべてを使って車を横に並べれば、七台でも可能だという代物だ。そこからは目障りな電線の類が全部きれいに片付けられ、ゴミ箱でさえ、景観の印象を妨げない。

表通りに並ぶ家々はモダンで近代的。建物の一部に敢えて木を使う洒落れた雰囲気も、そこそこに見える。その上、家々の表札を覗くと、懐かしい名前が幾つもある。ただ、私を感激させる話はそこまで。

どこにも、子供の姿が見えない。建物すべてが森閑としていて、かつて商店が賑やかに並んでいた家々から、人の匂いが消えている。過疎、そして高齢化につづく経済社会の極端な停滞。現在の国家の最も気にする地方現象が、私の前に広がる。

確かに、建物も道路もすべてが近代的。写真だけなら、日本人の誰もが田

舎の理想的な風情として溜息もでるだろう。その中心部に私の借家がある。無落雪にして、総面積百八十平米と聞けば、さらにもっと驚く人がいる筈だ。しかしやはり、若々しい人々の姿が見えない、あるいは匂わない世界には虚しさが付きまとう。

―嫌でも応でも、これが私の故郷。―

その想いに包まれながら、目線を足元から遠景に移す。家の裏側に昆布岳、北に視線を変えようと、同じ家の二階からニセコ連峰の穏やかな山並みが見える。そして最後の決め手は蝦夷富士。それは町の東側に雄々しく聳え、見る者に畏敬の念さえ与えるような山だ。

私の中の故郷はこの蝦夷富士の姿にあるかもしれない。この町からすべてのものが消え去っても、蝦夷富士さえあれば、私の故郷は故郷でありつづけるだろう。

故郷、この言葉に込められた印象を説明するのは難しい。それは単なる考えとも違う。感情でもあり、情緒でさえあるかもしれない。ともかく、人間の内部に留まる故郷への思いは、人々に帰郷を促す麻薬とでもいえないうか。

私がニセコに戻ったゴールデンウィーク直前の時期、寒さが足元を逆撫でる。

(六) 故郷ニセコの実像

身体は確かに故郷ニセコに戻った。しかし、心の中はまだ落ち着かない。着くと同時に始まったゴールデンウィーク。本当に、多くの観光客が車に乗ってやってくる。

我家の前にはニセコ郵便局があるくらいだから、中心街の中の中心街に違いない。そのせいで、この町と周囲の温泉街に集まる人の半数以上が目の前を通過していく。

北海道の観光地はいつもそうだ。長く厳しい冬が終わるのを待ちかね、こうして少々寒くても、一斉に観光地を目指す。これは必然的な北海道人の習性。私にも、その気持ちがよく分かる。

自宅から出て十分のニセコ駅に向かう。一級河川に指定された尻別川の岸近く、この町で一番低いところに駅がある。昔は寂しい駅だったが、今は瀟洒なトンガリ屋根を備え、見てくれのいい建物がそこにある。

JR列車の到着は一時間半に一本程度。それでも、普段とは違った人間がその改札口から吐き出される。

当然、日本人も多い。しかし、噂に聞くオーストラリア人に交じって韓国や中国系の人も見えるような気がする。ところが、駅を出た途端から問題が起る。

町を親切に紹介する人間の姿は見えない。タクシ―の運転手は英語が駄目で、しかもニセコ山麓に点在する数百を越すペンションの名前も場所も分からない。これは一体、どういうことか。理解に苦しむ。観光客の積極的誘致活動はどうした。ここが自分の故郷だけに、恥ずかしさを覚える。

仕方なく、今度は坂道を登り、町役場など公共施設が寄り合う場所に出る。それら建物の間には幼児のブックセンターがあり、JAのミニスーパーマーケットもある。

町役場にもJAスーパーにも人影は絶えない。役場職員の姿もちよくちよく見受けられる。ところが、そこに車でやってきた観光客に対して地元人間の態度が問題になる。

何か聞いたような観光客の姿が目に入ると、地元の間はずぐ眼をそらす。そればかりか、相手が外人観光客と見ると、すべての地元民が接触を避けるように方向を変えるか、急いで下を向きながらやり過ごす。となれば、もうなにも言うことはない。

―これは大変な故郷だ！―

思い余り、JYの脇を通って自宅に戻る。ただ、逃げ帰るような自分の姿がやり切れない。

自宅ではすぐ、一杯のお茶かコーヒーを入れる。南面全体に二重窓を回したりビングの椅子に腰掛け、前方の昆布岳を眺めながら、足元に広がる借家の敷地に眼を向ける。

ゴールドデンウイークのこの時期、さすがに雪はない。が、荒れ放題の土地が辺り一面に広がっている。面積は二百五十坪程度か。それにしても、ササやイタドリに加えて、背の高いヨモギやいばらの蔓類に覆われたこの世界は一体、どうしたというのだ。

表はこの町唯一の中心街。最近付けられたという名称は綺羅街道。なのに、その表側から一步裏に回れば、この世界をどう説明すればいいのか。説明でなくて、弁明はどうなるのか。気持ちは重く、苦しく、情けなさが溢れてくる。

しばらく考え、目を改めて裏の整地作業に取り掛かる。まず初めは目に付くガラクタの片付け。古く腐り掛けた木質の破片。あちらこちらに姿を見せる大小の石の始末。それをすべて手作業でやると、一月半という時間が流れる。

それが終わると、地面に紛れ込んだ鉄屑やガラスの破片の後片付け。この土地に人間が住んで約百年。その間に自然と溜まってしまった量は馬鹿にならない。

一枚の窓ガラスが割れると、その破片は数百から数千にもなってしまう。また、北海道の家では最初の時期こそ有り余る薪を燃料にしていたが、戦後

の二、三十年に限っていうなら、薪が石炭に替わっていた。しかし、後始末のいらない薪から石炭に変わると、民家では処理出来ない大量の石炭ガラが出てしまう。

人々はそれを近くの窓から外に向かって投げ捨てる。その結果はどうなる。家という家の周りは石炭ガラで埋まり、時間の経過と共に、それが土の中のめり込む。

そんな石炭ガラがガラスや鉄屑と一緒に交じる大地。私はその一つ一つ、手袋を履いた手でつまみ出し、黙々と片隅に片付ける。

時間はどんどん過ぎていく。春は夏へと変わり、夏は長い冬の季節と変わっていく。それでも裏の整地作業は終わらない。

翌年の秋の初め、どうにか整地作業は終わった。それと同時に、裏の世界に新たな光を与えようか、と考える。

家に近い手前は花園、そして二十メートル以上離れた場所は町営のアパートがづくから、小さいけれど児童公園にでもしてしまおう。

時期が時期だから、ホームセンターに並べられた花の種類は少ない。それを承知で二、三百株の花を買い揃え、どうにか裏の世界に並べてみる。しかし、その直後に雪が降り、花の季節は終わっていた。

(七) 庭と遊園地

ニセコに戻って三年目、雪解けを待つて再び自宅裏での事業再開。すでに去年の晩秋には全体の整地作業も終わり、今年は最初から積極的になにかをつくる作業に掛かれる。

花園の方は毎年買い込む一年草の花々を止め、多年草に切り替えようと思う。それについては地元在住のお年寄りの方々から、支援の約束を取り付けてあるから問題ない。では今年、なにに全力を注ぎ込むのか。そう、近所の子供達に小さくてもいいから児童公園を造る約束があった。

家から裏に出る。しかしもう、そこは荒地でなく、周囲の人も認める庭の世界。早くも水仙やチューリップの時期が終わり、今や可憐な芝桜が広い範囲に咲いている。

そこを南北に突き抜ける一筋のまつすぐな道。巾ほぼ一メートル、長さ約二十メートル先に遊園地のための用地が見える。

面積は百坪足らず、しかし、すべての障害物を取り除いた平坦な土地そのものには自信がある。

その中に立って、まず考える。どこになにを配置するか。ブランコはどこに、すべり台と砂場はどこがいいか。こんな気楽な思索の時間ほど楽しい時間は他にない。

まず、南東の端にブランコ。それは余りにも小さければ小学生は満足しない。だから、幼い子供はすべり台や砂場で遊んでもらうことにして、少し大きめのブランコを考える。

主な材料は間伐材の丸太。その皮をむき、さらに磨きを掛けてもらったものを近くの森林組合にまず注文する。直系二十センチ、長さ十二尺。果たして自分のような老人が取り扱えるかどうか分からない。

やがて材料の到着。深い穴を二つ掘り、丸太の一端をその中に埋めてからセメントを流し込む。少しそのセメントが乾き始めるのに合わせて、丸太を二本共に垂直に立ち上げる。これには傾斜計や水準系が欠かせない。

三本目の丸太には左右にまた二つ直径二十センチの丸い穴をあけ、それをセメントが固まった二本の柱に乗せる。ただし、この作業を一人でやるのは容易でない。何度も失敗を繰り返し、長い時間を掛けて最初の仕事は終わる。

北海道の春だというのに、額の汗が止まらない。両腕も痛みはないが、棒のようだ。

最後に二本の太いロープを頭上の丸太に括り付け、どうにか約一カ月で最初の仕事が完成。見上げると、自分でも自慢したくなるようなブランコが風に揺れる。

次は砂場、これには余り金もかからず、仕事も楽だ。直系一五センチの丸太を四段組み上げ、その中に三立方メートルの川砂を投げ入れる。所要時間は一週間。これで二つ目の作業が終わる。

それを潮に一旦、遊園地造りから手を引き、花園の完成に力を注ぐ。これには力こそいらぬが、なんだかんだと時間が掛かる。その間に近くの町営アパートから出てきた子供達が、

「おじちゃん、もう砂場やブランコで遊んでもいいの？」
と聞いてくる。

「いいよ、みんなで仲良くな。」

それを聞くと、子供達の間には歓声が上がる。その喜ぶ姿を見ながら、良寛さんを思い出す。

―俺も歳をとったな。もう古希の人の仲間だからな。―

十月初旬、真冬を前に最後のすべり台造りに取り掛かる。この作業は難しい。相棒がいるなら簡単に済みそうだが、一人仕事はすべり台の傾斜と柱になる丸太とのバランスが困難をきわめる。

時間がドンドン過ぎていく。場所が北海道だから、気温も下がる。十一月に入ると、雪もチラつく。夏一杯の疲れが全身に染み渡る。それでもあと一つ、あと一つと自分を騙しながら作業をつづける。

始めてから一カ月半、早くなった夕暮れの薄闇の中で、最後のすべり台も完成。尻もちを搦き、灰色の暗い空に眼を向ける。

—こんなことでよかったのか、……………？—
ふとそんな言葉が頭を過る。

—多分、これでいいのだろう。—
というのは自慰行為だろうか。身体を横たえたまま、沈黙の中で思い耽る。年齢にして七一歳の身勝手な独居老人。がそれにしても、故郷に戻ってここまでしたら、あの父親もよるこんでいるのではなからうか。そして近くの子供達とその若い母親達も、……………。

十二月、大雪の中で正月を迎える。やはり家の中に人影はない。ふと我と我が身を振り返り、遙か彼方に消えようとする現役時代の自分を思い出す。すべてが予定通り終わったとはいえ、来春に向かつて、やり残していることがないか、別な頭で考える。しかし、この一年は疲れた。疲れ切った故の満足感もなくはない。

たかがこれだけ、されどここまで、ふと夜になると、話し相手も欲しくなる。

(八) 故郷創生

故郷に戻って四年目、雪解けが待ち遠しい。三月の太陽の光を受けて、少しづつ減りつづける根雪の量を眺めては、後何日で春になるかと、窓から外を眺める。でも、だからといって、今年だけ春が早くなる訳にいかない。

待ちかねたゴールデンウィーク、各々百株の水仙とチューリップが咲き出す。つづいて、巾二尺から三尺程度、折れ回りながらつづく長さ七、八十メートルの芝桜が一斉に咲き始める。ピンク一色に染まった芝桜、それが雪解け直後に咲き出すのだから、感謝と感激の心を同時に促す。

雪解けを待ちかねて、子供達も児童公園に姿を現す。飛び跳ね、走り回り、そして歓声を挙げる。その姿を見て、心が自然に馴染んでくる。

もう新たな手を加える必要もない。ブランコにせよ、すべり台にせよ、春の光りに輝き、土台にも不安の影は見当たらない。

—これでよかった！—
つくづくそう思いながら故郷の日々を送る。

だが、故郷に戻るという自分の決断が、この程度で終るなら、単なる自己満足に過ぎない。それでは家族を犠牲にする決断という行為の意味が問われる。

居間の椅子に腰掛け、ゆっくり子供達の様子をやや離れた場所から、一杯のコーヒーを片手に考え直す。

故郷ニセコには唯一ともいえる文化施設がある。それがかの有名な有島武

郎の記念館。かつての北大で英語を教えながら、親から受け継いだ農場にきて数々の文学作品を書き残してくれた人物である。

その記念館を管理する人材を北大から探してきて欲しいと、片山町長には最初から頼まれていた。だからそこに、私の孫弟子に当たる伊藤君をすでに正規の職員として招いている。

片山町長はまた、テレビやテレビゲームに浸り切る子供達の嘆かわしい現実を少しでも変えようとして町が作ったアソブクセンターも当初から支援して欲しいと言っていた。そこで古い時代の腕白仲間だった友人・知人を騙し、そのセンターにも四百冊を超える児童書もすでに寄贈している。ではもう、故郷で私の出来る仕事は残っていないのか。

四年目のこの年、日を置いて、多くの人が我家を訪れる。諸外国から来る人を含めると、一月一五人から二十人余りの人が我家で食事をしたり、泊まる人も出てくる。しかし何故か、地元の人々の到来は少ない。

不思議に思い、街中を巡って知人達の家々を訪ね歩く。そこであることに気付いた。

ここニセコで生まれ育った人々には揃って臆病なところがある。悪く言えば、家族親族以外の者を疑いの目で見ている。だから、彼等はみんな、他人を恐れ、逃げるように暮らしている。とすれば、その点を観光地発展のために取り除く仕事はまだ残っている。

そう気付くのは易しい。しかし具体的なこととなれば、話はいっぺんに困難さを増してしまう。自宅に戻り、また窓の外をポツネンと眺めながら考えに耽る。そこでふと、故郷再生という言葉に代わって、故郷創生という言葉に気付く。

—このニセコの町には輝くような過去はなかった。だとしたら、故郷再生などという言葉はニセコを発展させる際のモットーにならない。だからやるなら、故郷創生もしくは地方創生をモットーに新たな思案と行動が必要になる筈だ。—

そう思い直し、視点を変えて新たにまた考え始める。その一カ月後ある思案に辿り着く。

大正十年、ニセコに発電所が出来た。それは東京に本店を置く巨大企業の王子製紙(株)という会社が自社工場の動力源として開発したものだ。現在も時代に沿った発電事業をつづけている。

太平洋戦争の最中、その発電所本体は米軍の爆撃を恐れ、全体に泥絵の具を縫ってしまったが、本来の姿は東京駅や北海道庁の赤レンガ庁舎とまったく同じく、見事な赤レンガで造られている。

—それを現代の時代的要請に合わせ、新たな自然循環エネルギーの里とでもして有効に使おう。—

私はそれに気付くと、一気に新たな行動計画全体が頭に浮かんだ。

王子製紙後志第一発電所。亡父はその施設に関して大正時代前半の計画段階から加わり、昭和六年から二二年までの十六年間、所長の任に当たっている。しかもそこは私が生まれ、六歳まで育った場所でもある。

新たな発想が生まれた。それと同時に、私の心も生き返った。

一人自宅に籠り、企画書の趣旨を私的な話から社会的な時代状況に合わせたものにして書き上げる。現地の写真を撮り、勤務経験のある一人のお爺さん（八六歳）を探し出して、現地全体のスケッチも書いてもらう。

でき上がった趣意書と写真とスケッチを繋ぎ合わせ、さらにパソコンのプロを自認する知人にやつてもらった発電所本体の復元図もどうやらでき上がり、

—これで準備は完了。後は町長の事前承諾を得て、銀座の本店に乗り込むばかりだ。—

と年甲斐もなく意気込み始める。これはどうやら私という人間の本性のようだから、止めても止まらないことのようにだ。

(九) 故郷創生計画

故郷創生の新たな企画案をまとめたとき、別な難題が浮上する。借家の賃貸契約書が私の新たな決断を促すのだ。四年前に家主と交わした契約期間は満五年。それを四年が経過した今、家主から確認の電話を受け取る。

その契約は頭を下げて伸ばせるかもしれない。しかし、相手の顔や声に覗く嫌味を考えると、今更よろしくとも言いたくない。その上、離婚後十五年目を迎える元の妻が二年前の電話で、

「私は貴方と一緒に死にますからね。」

といて憚らない。その一言が改めて私を縛る。

頭は幾らでも使えるが、身体の方は只の一つ。しかも、元の妻が暮らす札幌からこの故郷ニセコの問題に取り組むのは、共倒れの危険性に満ちている。だから困る。だから苦しい。これが人生における決断の難しさだ、とはつきり言える。

ニセコの家には私の企画案を聞き知った人々が次々と現れる。元東北電力の社員、石油メジャーの地下資源探査会社の元研究員、IBMの元プログラマーもいれば、東京近辺の元銀行員から船会社の元船長。さらには、シテイバンクの元社員を名乗る人物もいる。

年齢は四十代から六十代、みんな私よりも若い。Iターンという素性で一致している。だから、私の企画案で仮に全員が動き出すにしても、地元町長はもとより、王子製紙本社役員との事前折衝では役柄が問われてしまう。

亡父とこの発電所の関係は九十年以上に遡れる、また、従兄の中には、王子製紙本社を退くに当たり、子会社の社長を務めた者も二人いる。その縁故を頼りに事前折衝となれば、私なら、代表取締役社長と対で話し合い可能だし、最善に思える、……？

私はどんな会議も嫌いな人間。問題を複数の人間で考え、議論すれば、多くの企画案はつぶされる。物事を細かく分けて個々に分析すれば、すべての企画案に疑問符が当然起こる。だからこそ、相手は唯一人、代表取締役社長ということになる。

日本国内の経済社会や企業の内部に詳しい人はすぐ、そんな私の判断に同意してくれる。だが、話はそこまで。

「では、経験を生かして私が事前折衝当たりましょう。任せてください。」という方向に話は決して進まない。

話が頓挫する中、東京の親しい知人の紹介で、王子製紙の関係者が東京からニセコに来る。最初はその情報に小躍りすることもあったが、目の前に来た相手の姿を見て、具体的な話を止めてしまう。

現役をすでに引退しているというその男には元社長、あるいは元本社重役といった臭いがしない。強いて言うなら、元本社の課長か、どこかの支店長という臭いがプンプンとしてくるのだ。

—これは拙い！—

そう感じた途端、折角東京から来てくれた相手と他愛ない世情話でことを収める。そこに同席していた地元の間人も考えは同じようで、後から質問も疑問もしてこない。

人間にはみんな、固有の臭いが染みついている。それは多分、先天的なものではなく、長い人生や職業の中で無意識に育まれたものだと思う。大いに直観的で、余りにも分析的でない話だが、野生動物の研究で培った私の心に揺るぎはない。

ただ、この直観には多くの人を納得させる言葉がない。それが悲しく、大学で愛弟子を育て上げられなかった主な理由でもある。背中で動物を観察するとか、信号機のない交差点で左右を見るな、と学生達に語り掛けると、全員が頭を傾げ、私の前から次々に姿を消してしまう。

敢えて私を研究上での指導者を選んでくれた卒業生の一人は今、京都大学で教授を務め、人間や動物の嗅覚研究に勤しんでいる。が、三十余年の教員生活で、私の言葉を信じてくれたのは彼一人、あるいは二人。他はみんな、そっぽを向いて大学から離れて行った。

ここまで話は突然、横道にずれてしまったようだ。だから、話を元に戻す。私の建てた企画案を詳しく話すのは難しい。ワーフロ原稿で全十五枚。それは他に類例のない内容だから、敢えてここでは割愛したい。その代わり、

今現在の状況は話せる。

参加することに意味がある、と言った程度で加わる人の数を含めると合計は十余名。その前に私自身の決断が必要だとしたら、この話はまだ、玄関の先に出ていない。

人間にとって、決断することは難しい。しかも、私のような古希世代ともなれば、その難しさはさらに深まる。それが現在の社会から本当に期待される事業であればあるほど、決断の後から次々と難題が現れ、後悔に後悔をかさねるような事態も考えられる。

今はまさに、決断の時。しかしその前で、諸々の事情や状況に戸惑う人間がいる。古来の人の言葉通り、今更ながら、人生は終わるまでなにが起こるか、起こせるか分からない。

(十) 駄目ザルの教訓

故郷創生計画は手元にある。その反面、借家の賃貸計画期間が目前に迫る。考えは堂々巡り。故郷にこのまま残って人生を全うするか、それとも借家期間の壁に負けて故郷を離れるか。考え、戸惑い、そしてまた一人で考える。そんなある日、ふと駄目ザルのことを思い出す。彼（牡ザル）の話はすでに一度書いてある。しかしこの状況下で、私は彼の類まれな決断と行動について考え直してみる必要があると思った。

あれはニホンザルの集団や社会に定着しているかに見える社会的な順位制に関連する話だ。つまり、動物園や全国に見掛ける野猿公苑で観察すると、必ず成長した牡の間で一から十までの順位がある。その順位は単なる名目に終わらない。餌を喰う、陽だまりを選ぶ、発情期に気に入った牝を抱え込む。いつ集団で動き出すか、どこで寝るか。そのすべてにかれるの順位が関係する。

しかし、幾ら野外で観察しても、誰がどんな理由で何番目の地位に着けるか、その実態がどうにも掴めない。そこで私は考え、彼等を閉じられた世界に追い込み、その順位制度が堅持される限り、多くのサルが飢餓に追い込まれるという、きわめて野蛮な情況を実験的に作り出した。

相手はニホンザルの牡五頭。部屋は狭く、バケツ一杯の餌が毎日その部屋にあるのはたかだか一時間と三十分。事前のテストによると、このままでは三番以下のサルに食事の順番が巡ってくるとは考えられない。

実験初日から、予想は見事(?)に的中する。一日分の食事を満足に食べられたのはボス(第一順位)ばかり、二番目のサルで腹半分。そして残りの三頭は餌の欠片も手に入らない。

この集団実験に先立ち、個別の知能・体力・意欲といったものは別の実験

で確かめてある。その結果、何事にも最低の数字しか出さないサルは例外的に一頭いた。それをここでは仮に駄目ザルと呼ぶ。

狭い実験室に餌がある間、この駄目ザルは金網の上に登って降りられない。そこから少しでも餌のある床の方へ動こうものなら、腹を空かした上位のサルが飛び掛かる。追い掛け、噛み付き、また追い掛ける。

だから実験も三日目になると、この駄目ザルに限界の時が近づく。しかしここから先に起こった話を人間の言葉で描写するのが難しい。そこで次に、表現を単純化して、時系列に沿って並べてみる。

食事の間に金網の上から全体の流れる観察する↓仲間の性格を個別に捉える↓独自の戦略を考え出す↓牡特有の性質を捨て、取り敢えず牝になる↓最適のタイミングを考える↓金網を一気に駆け下り、ボスの背中に寄り添う↓牡ではなく牝特有のオベンチャラを繰り返し、ボスの顔を自分に向ける↓姿勢を反転し、二番の牡を威嚇する↓相手が怒り出したら、ボスの背中に回ってまた威嚇をつづける↓その姿に苛立った二番の牡が身近に迫って攻撃の姿勢を見せたら、ボスを誘って反撃に出る↓相手が当然屈服するから、ボスと一緒に餌箱に戻る↓餌箱に手を入れ、握れるだけの餌を握って次々と口に放り込む↓手元に一旦餌がなくなると、ボスの身体に片手を触れながらまた二番の牡を威嚇する↓ボスを先に立てて相手に噛み付く↓・・・・・・

最終的にこの駄目ザルは全体の二番目にランクを上げ、餓死の危険から身を守った。

故郷を来春去るかどうか決断しかねる私は今、この駄目ザルからなにか重要な側面が見えるような気がする。それは三つある。

第一に、ことと次第によって、牡でもメンツ（誇り）を捨てること。次の第二の点は、下げたくない頭でも必要ならあつさり下げてしまうこと。そして最後に最も重要な第三番目の点は周囲をじつと事前に観察し、頭を整理しておくことだ。

さて、私はあんな駄目ザルに習えるだろうか。長年放さなかった依怙地な誇りを、ここで手放すことが出来るだろうか。さらに相手嫌わず、頭を下げることはどうだろう。これはすべて、なかなか難しそうだ。

しかし、ことここに至って、駄目ザル君に手本を学ぶしか方法もなさそう。そこで次のように考えてみた。

まず、嫌な家主に電話を掛け、賃貸契約延期の了承を得る↓札幌にいる元の妻に、ニセコへ来るよう誘ってみる↓新潟に置いてきた中学二年の娘にも連絡を取り、ニセコに来るなら待っている、と言ってやる。

さて、結果はどう出るか。直接の相手もいれば、その周りに取り巻きもい

るだろう。彼等が思い余って自分の周囲にいる人間と話し合いを始めたなら、答えはすべてNOだろう。が、それはそれで仕方ない。

腹は決まった。これも一つの決断かもしれない。今迄の自分の決断の仕方とはどこか違う。それでもいい。人生は歪みに歪む轍のようなものだろう。あるいは、インドで乗った長距離バスの姿にも似ているかもしれない。

あれは本当にひどかった。前は水牛に曳かせる牛車に塞がれ、すぐ脇の道路をノロノロと無数の人力車が走りつづける。だから、バスの運転者はいつも休まずハンドルを左右に切らなければならない。

まあ、決断の話も、帰郷や離郷の話もこれで終ろう。ともかく疲れた。

窓の外を木枯らしが吹く。冷たく湿った大地に、色あせた紅葉の葉が流れていく。

あとがき

この原稿を書き出す前に、私は長い年月の間に幾つか本の原稿を書いています。

「アラスカで逢った人々」

「野良犬達の晩鐘」

「老猿フーちゃんの眩き」

「日本人とニホンザル」

「ロシア日記上下巻」

これらはみんな、私が人生で直接出会った印象に残る人間と動物達の話ですが、未だ出版の予定も、その必要性もありません。ただし、その中に書き残しておいた様々な体験と経験の一部は話を極端に短縮し、この本の原稿の中に取り入れてあります。

さて、この本を書いた直接の動機について話します。

それはこの夏の初め頃のことです。ある日、いつも出掛けるブックセンターの片隅で上下二巻の本と出合いました。タイトルは「晴子情歌」。とてもシンプルで表題から、その本の内容を予測することは難しい話に思えました。

しかし、無造作に手を伸ばしたその本に、私は何故かすぐ惹かれるものがありました。だから、その本を借りて自宅に戻ると、私は熱心に読みつけました。

作者は女流作家の高村薫。最近の、しかも女性の書いた小説に興味のなかった私にとって、その作者の名前も顔も縁遠いものでしたが、本の内容にはどうしても途中で捨て切れぬものがありました。

主人公の晴子は大正の末期か昭和の初めに生れた女性です。彼女は小さい頃から素直でとても従順な娘だったと書かれています。そして、思春期から初老の直前に死ぬまで、彼女晴子は親や少し縁の遠い一族の思惑に沿って、次々と服従という言葉に近い従順な姿勢のまま、この世を去ります。

この間、彼女は血の繋がらない二人の子供の母親となり、名実の伴わない結婚も強いられます。そしてまた、彼女晴子は義理の兄からも犯され、一人息子の彰之を産み、かつ育て切ります。

その主人公の晴子が、これも私の人生。悔いることなどありません、という言葉を残して死んで逝くのです。

ところが、この「晴子情話」につづいて、高村薫は「新リヤ王」という姉妹編を上下巻の大著で書き残しました

その中の主な登場人物はただの二人。一人は晴子の実の息子として育った彰之、もう一人が彰子を犯して彰之を産ませた義理の兄の「栄」。その二人が

「新リヤ王」という小説の中で、延々と語り合います。

場所は津軽半島の片隅、季節は吹雪逆巻く時、そして二人がときに激しく、またときには物静かに語る会う部屋は廃墟のような古寺の一室。

作者高村薫は無頼の人間や修行僧になってみた経緯を前提に、息子彰之には人生の虚しさを語らせ、大胆かつ精力的に生きた彰之の父親「栄」には、どんなに努力して社会的な地位を得ようと、最後に残るのは虚しさだけだ、呟かせるのです。

この膨大な量になる高村薫の作品にはフィクションを超えた力があり、彼女の作家としての能力を私も心から大いに評価したいと思います。ただ、こうした魅力的作品はそれ故にこそ、これから自分の人生を考える若者には危険な側面も否めません。中学から高校と多くの文学作品を読み耽った私は後日、自分もその犠牲者だったと思うことがあります。

さて、こんな思いを胸にしながらか書き進んだ私のドキュメンタリーは如何でしたでしょうか。事実は小説にも勝る、という言葉に賭けた著者の願いは果たして耳によく聞こえたでしょうか。

不安半分、自信半分。皆様からのメッセージをお待ち申し上げております。

ところで、私は最初、この本の原稿に「帰郷そして離郷」というタイトルを付けました。しかし、本文を書き進める中で、話が思うように離郷という展開にならないのです。したがって、当初のタイトルを諦め、単に「帰郷」というタイトルにしました。果たしてこんな無責任な話で良かったのか悪かったのか。ご判断は皆様にお任せします。

二〇一四年十二月一日

故郷ニセコにて 鈴木延夫